土器・瓦 13

土製小壷と茶の湯の“つぼつぼ”

（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

京都市内の発掘調査では江戸時代の遺跡から、丸い土製小壷がよく出土します。都市遺跡では京都のみで多量に出土していますが、用途不明の遺物でした。

831個の土製小壷　御所南小学校（中京区柳馬場通竹屋町下る、1993年調査）で実施した発掘調査（調査面積3100㎡）の出土資料から土製小壷の数を調べたところ、831個を確認しました。出土したのはゴミ捨て穴・井戸・溝などからで、17世紀前半から幕末までの江戸時代全般にわたっています。

大きさは、胴径3～4㎝・高さ1.5～2.5㎝前後にほぼおさまります。成形方法は一様に手捏ねです。内面は細いヘラ状のもので渦巻状に削り、外面は指でなでるか、押さえて仕上げています。全般には丸形が最も多くみられますが、少し異なる形もありました。

御所南小学校の発掘調査で出土した土製小壷

茶の湯の“つぼつぼ”　茶の湯には、土製小壷とほぼ同じ大きさと形をした手捏ねの磁器や楽焼があります。新築した茶室に初めて客を招いて催す茶会（席披き）のおりに、釉などを入れて懐石膳に一つ添えるというもので、“つぼつぼ”と呼ばれています。伝世品はあまり知られていませんが、氷楽保全（1795～1854）や樂慶入（1819～1902）などの作があります。

また、この器から考案されたといわれる“つぼつぼ文様”があります。特に裏千家第八世・一燈（1719～71）の頃から、この文様をあしらった茶道具が多く作られ

後方左より長形・丸形・くびれ形、前方左より台形・扁平形

楽慶入　作　赤楽つぼつぼ

一燈の好み物　つぼつぼ書合

るようになりました。以来、茶の湯では広く親しまれている図柄です。

伏見稲荷の“つぼつぼ” 江戸時代には伏見稲荷の初午祭りで“つぼつぼ”という土器が売られていたことが史料に遺されています。

『天和長久四季あそび』の「初午まいり」には、「でんぼつぼつぼうり」の文字がみえ、参道前の賑わう露店が描かれています。

寛文二年（1662）刊行の地誌、中川喜雲著『案内者』には、初午稲荷詣の条に、「…大小土器の茶碗の勢したる物を田炮と名づけ、底平に懐ふくれ、口せばく李の勢したる物をつぼつぼと名づけて、聲々に賣けるを手に手に買い取り、前にいだき袋に入れてかへる、をし合ひもみ合ひ、取り落として打ちわり、おしひしぎて争いするもあり…」とあります。

この記述にみえる“つぼつぼ”は、明らかに出土の土製小壷とよく似ていることがわかります。また、争って買い求めるほど人気があったということは、普及していたということですから、土製小壷が京都市内からよく出土することとの関連性がうかがえます。これらのことから、出土の土製小壷は伏見稲荷の初午祭りで売られていた“つぼつぼ”であると考えてよいでしょう。

古老に訊ねる　目片宗允氏（茶道研究家 1908 ～）によると、「伏見稲荷の“つぼつぼ”は稲荷山の土を入れて持ち帰り、田畑に埋めて豊穣を祈念したもの」といわれています。また、茶の湯の“つぼつぼ”については、「表千家第六世・覚々斎（1678 ～ 1730）の頃には、稲荷の素焼（土製）の“つぼつぼ”を買ってきて樂家（桃山時代より代々京都で茶陶を製作する樂焼の窯元）で釉薬をかけて焼いてもらい、懐石に用いた」ということです。これは伏見稲荷の“つぼつぼ”、つまり土製小壷が茶の湯の“つぼつぼ”のルーツであるということを示す興味深い内容が含まれています。

さて、出土した土製小壷のなかには、墨で絵や文字が書かれていたり、孔があけられているものなどもみつかっています。このような、あとで手を加えられたものは何を意味するのか、これも今後の検討課題です。　（堀内　寛昭）

「二月初午まいり」『天和長久四季あそび』より（京都府立総合資料館蔵）

初午とは、和銅四年（711）二月の初の午の日に伏見の稲荷山に神が現れたとされる日で、この日に催される祭りを初午祭り（福参り）という。